朗読劇

# 山頭火物語

―鴉啼いてわたしも一人―

俳人 天才
雲水 酒乱

行乞は雲のゆくごとく、流れるようでなくてはならん。
木の葉の散るように、風の吹くように、
縁があればとどまり、縁がなければ去る。
そこまでの姿勢に到達せんにや、
行乞流転の意味がない。

作・朗読 中村敦夫

制作 中村企画
演出 窪島誠一郎
美術 ヒグマ春夫
共演 吉村 直（第6回）
佐々木梅治（第7回）

## 第6回公演

8/30（金）午後7時～
8/31（土）午後2時～
9/1（日）午後2時～

会　場：日比谷図書文化館
地下コンベンション・ホール
（地下鉄「日比谷駅」下車、14番出口。公園内）

## 第7回公演

11/2（土）午後7時～
11/3（日）午後7時～

―神保町ブックフェスティバル参加公演―

会　場：岩波書店アネックスビル3F
岩波書店セミナールーム
（地下鉄「神保町駅」下車 A6出口。交差点そば）

入場券：3,000円　予約制（当日清算）
予　約：（株）中村企画　Tel：03-5376-9553　Fax：03-3321-0682
E-mail：office.monjiro@gmail.com

## 流浪の俳人

# 種田山頭火の生涯

山頭火（本名・正一）は、一八八二年（明治一五年）、現在の山口県防府市で豪農・種田家の長男として生れた。

一〇才の時、父・竹次郎の放蕩三昧に苦悩した母・フサが、自宅の井戸で投身自殺。この後も姉の病死、弟の樹林での首吊り自殺などがあり、「死」は山頭火の生涯を貫く哲学的な主題となった。

幼少時から文才を発揮した山頭火は、二〇歳で上京、早稲田大学文学部の第一期生となる。だが、精神的な不調が続き、二年で退学し、故郷へ戻る。借金で首の廻らなくなった父は、家作のほとんどを売り払い、近隣の村へ転居。手元に残った金で、酒造所の経営を始めた。

山頭火も家業を手伝いながら、郷土文芸誌に俳句や翻訳を発表。三一才の時、俳壇の新しい運動である自由律句（季語や五七五の定型を無視）のリーダーであり、同人誌「層雲」の主宰者でもある荻原井泉水に師事する。

家庭的には、二四才でサキノと結婚、四年後に長男・健を授かるが、山頭火が家庭を顧みることはついぞなかった。

一九一六年（大正五年）、山頭火は三四才で「層雲」の選者に昇格し、文名を轟かせる。一方で酒造所が倒産、父は行方不明になった。自分も妻子を連れ、夜逃げ同然で熊本に向う。そこで、細々と古本屋（後には額縁屋）などを営んでいたが、このころ、生涯のスポンサーになってくれる大牟田の医師・木村緑平に出会う。

三年後、何を思ってのことか、妻子を放り出して突然上京。怒ったサキノの家族が強引に離婚手続きを敢行する。

一九二三年（大正一二年）、関東大震災に遭遇。左翼活動家として誤認逮捕されるが、数日後釈放され、熊本へ逃げ帰る。このあたりから、酒乱癖がひどくなる。泥酔して市電の線路に横たわり、電車が止まって大騒ぎ。乗客によるリンチ寸前で、知人が山頭火を背負い、近くの曹洞宗寺院へ駆け込む。この寺で三ヶ月参禅した後、出家得度する。

その直後、植木町味取観音堂の堂守を命ぜられた。独り朝夕に鐘をつき、時には近在を托鉢する日々が続く。

一九二六年（大正一五年から昭和元年へ移行）、山頭火は四四才で人生最大の決断をする。それは、作句三昧を目的とした終りなき行乞の旅の開始である。最初は、九州、四国、山陰、山陽などが多いが、やがて近畿や関東、東北などへと足を伸ばし、生涯の歩行距離は、芭蕉のそれをはるかに超えたと言われる。

この間、四回ほど庵を構えた。最初は、熊本で三八九居、次は山口県の小郡で其中庵、そして湯田温泉の風来居、最後は松山の一草庵である。

雲水としての行乞行脚の旅とは言え、決して安穏なものだったわけではない。酒乱、奇行、反省と出直しのための座禅、そして定期的に訪れる精神の不調、自殺未遂、それらのくり返しだった。

一九四〇年（昭和一五年）、山頭火は望み通りのコロリ往生を遂げ、五八才の生涯を終えた。

残された作品は、二万句に及ぶという。

みなさまへ

うだるような暑さが続いておりますが、みなさまお元気でお過しでしょうか？

さて、まことに唐突ながら、朗読劇の御案内を差し上げる無礼をお許し下さい。

これは、明治、大正、昭和を生きた流浪の俳人・種田山頭火の物語です。明治維新に始る日本の近代化、西欧化の怒濤に翻弄されながら、遂には東洋的、禅的な価値観に回帰した芸術家――その魂のゆらぎに刺激され、こうした作品の発表となりました。

舞台は、山頭火と黒子（批判者）の掛け合いで進む一幕六場の朗読劇です。

年齢を考えますと、俳優としても作家としても、どうやら私のライフワークの一つとなりそうな気配です。すでに、地方を中心に八回の公演を行ってきましたが、いよいよ東京での本格御披露目となりました。

もし興味を抱かれましたら、御友人などにも声を掛けられ、是非劇場まで足をお運び下さるようお願い申し上げます。

最後に、みなさまの御健康とますますの御活躍をお祈りし、筆を置かせていただきます。

二〇一三年　夏

中村　敦夫

中村敦夫